

日光輪王寺五大明王像彩色保存処置

受託研究報告 第 26 号

茂 木 曙 ・ 立 田 三 朗

1. はじめに

日光輪王寺五大明王像の制作年代は不明であるが、室町時代に遡るとも言われ、江戸時代初期以降のものではないと思われる。日光東照宮造営当時から境内の護摩堂に、十二天像と共に安置されていたと伝えられている。明治4年神仏分離の際に、日光二荒山神社にあった三仏堂を輪王寺境内に移築した時に五大明王像は三仏堂に、十二天像は三仏堂裏の裏殿に移されて今日に至った。

近年の三仏堂修理の際も明王像はそのままに、本体及び台座等の極彩色は剝離剝落が甚だしく、永年の間に積った埃は層を成して、寄木造りの部材の剥がれている箇処が数多く認められた。

この五大明王像の彩色剝落どめを主とした保存処置を、昭和 41, 42 年度に亘って保存科学部の受託研究として実施した。

今回の研究の目的は特に厚手の顔料層及び下地層の剝落どめが主体であったが、更にこれに附随して錆化の甚しい鏝、鉄釘を出来得る限り新たに作った銅鏝、銅釘などと取替えて締め直し、矧付部から剥がれ落ちた部材については、矧目に正確に合わせて接着を行なった。

但し欠損部分の新補や、彩色剝落部分の補彩などは一切行なわず、又原則として後世塗り重ねられた一部の補修彩色部も現状保存とした。この処置は、化学研究室（岩崎友吉室長、樋口清治技官）の協力を得て修理技術研究室（立田三朗室長、中里寿兎技官、茂木曙技官）が実施したもので、物理研究室（登石健三室長、石川陸郎技官）がX線撮影による被取替鉄鏝、鉄釘の診断と合わせて寄木構造の解明を行なった。

尚実施に当り木工関係は前田康夫氏、彩色剝落どめには薬師寺 崇氏及び、芸大保存技術研究室中村弘太郎、同じく林 功の両氏の協力を得、特注の銅鏝、銅釘の製作は大石長治氏にお願いした。日光輪王寺の足立広文氏には終始お世話になったことを感謝する。



図—1 三仏堂内の五大明王像 処置前

2. 処置前の状況

① 不動明王像（本尊）（図—2）

法量，像高 76.5 cm，台座高 61 cm，膝張 63.5 cm，光背高 137 cm，巾 110 cm。

五つの像は共通して寄木造で，矧目に鉄鋸，鉄釘を使用し麦漆で矧目部に布着せを行い全体に漆下地の上に白緑を塗りその上に顔料を重ねている。修理前の状況は矧目部分の鉄鋸，鉄釘の殆んどが錆び，その部分の木部が腐朽したり，膨脹して胡粉下地を破り彩色共に損傷したり膨みを生じていた（図—7）。殊に左側胸部の鉄鋸腐蝕による傷は著しかった。台座の内側からや枠を固定している框金具は錆が進行して消滅してしまったものもあり木部接着に用いた麦漆も剝がれ枠が分断された箇所もあった。瑟瑟座の最上段の枠の一本は，姑息な修理のために天地が逆に取付けられていた。光背の一部が欠失しており，矧目の殆んどが緩んでいた。彩色の剝離剝落の著るしい個所は，本体では顔，腕，足などの肌部の群青でありこれは各明王像に共通した現象である。この部分の剝落には二様があり，一つは群青の塗り重ねの表層の下層からの剝落と，二つに胡粉下地もろとも剝落して木の素地が露出するものがある。又条帛や裳の部分などには断文による剝離，剝落が目立ち，瑟瑟座の彩色は稍厚手の胡粉下地の上に金泥で宝相華文を地文とし，円花文や羯磨等を描き緑青や朱で彩られている。この部分は比較的大きく胡粉下地もろとも木の素地から剝離し，剝落したものもかなり多い。宝剣や光背，狛犬などの金箔は下塗りと共に木肌から剝がれ，大きく反り上がっている処が，かなりあった。



図—2 不動明王 処置前

② 降三世明王（東方尊）（図—3）

法量，像高，105 cm，膝張 36 cm，総高 171.5 cm。

構造は寄木造り，本体の接合部は大體密着していた。但し明王が踏まえている大自在天と烏摩後の両方に跨って，木部に大きな目割れが入っていた。彩色は本体肌部の剝落がひどく，（図—8）他部では断文が少々認められた。金箔仕上げの杖の頭部に剝離がある。大自在天，烏摩後の胡粉部分の剝離が目立ち火焰光の朱も剝落が目立つ。岩座は泥絵具様の群青が主で厚くかけられ，それが細片に剝がれ，岩を構成している部林の台座との接点の釘が錆化消滅して，崩れているものが多く，これは他像の岩座に共通して言える状態である。



図—3 降三世明王 処置前

③ 軍荼利明王（南方尊）（図—4）

法量，像高 105 cm，総高 168 cm。

本体の左上腕が肘で折れ，右下腕手首が矧目から剝がれ落ち，右足が膝下の矧目から斜めに離れて，針金で縛り辛うじて立っていた。蓮座，岩座の緩みはひどい。彩色の剝落は肌部が著るしく，天衣の腰部が胡粉下地と共に袋状に剝離し，裳に断文が入る。足下の蓮座は，主色の緑青が下塗りの白緑から剝落しているがこの部分の彩色は後世の

補修で明らかに3度塗り重ねられていた。蓮弁も接合部から剥がれ移動したものや落ちたものもあった。左手小剣の金箔、火焰光の朱など、いずれも状態は悪い。

④ 大成徳明王（西方尊）（図一5）

法量，本体像高 85.5 cm，膝張 41 cm，総高 152 cm。

本体は水牛に乗る六面六臂六足の姿であるが，右3足の内の手前の足首が矧目から剥がれ彩色下地の布貼りで辛うじて落下せず垂れ下っていた。（図一9，10）左肩には釘の錆による傷があり，彩色は肌部の群青の剥落が特にひどい。火焰光の朱も同様である。水牛は角が抜けかかり，首及び横顔部に数箇処，鉄錆による大きな損傷があった。顔の正面にタール様の異物が一条，縦についている他は，彩色の目立った剥落は殆んどなく僅かに腹部に剥離が認められた。水牛の台を構成している荷葉座は，金箔が部分的に下塗りと共に下地層より浮上っていた。

⑤ 金剛夜叉明王（北方尊）（図一6）

法量，本体像高 102.5 cm，膝張 32 cm，総高 168 cm。

この本体も肌部の群青は荒れ，特に6本の手首は尽く剥がれ落ちて漆下地が露出していた。裳は断文が多く，手の小剣の金箔が剥がれていた。但し火焰光の朱は，東西南北四明王の内最も安定していた。足下の蓮座の彩色は剥落し，蓮弁の緩み及び岩座の損傷共に著しい。（図一11）

3. 保存処置

五大尊像共に永年の埃は層を成していたが，彩色を損なわぬように，特に屈曲部に念をいれ注意深く取り去った。各像に共通する肌部の群青は粒子の関係であろうか，顔料層が特に脆く，処置中に一触即崩壊の恐れが多分にあった。一般的に各像共彩色層，胡粉層が厚く又彫刻であるから表面が丸味を帯び弯曲し，しかも素地の木部が表層よりやや磨せている場合が多くて圧着が困難であった。

化学研究室から P.V.A 6% 溶液と，アクリルエマルジョン 20% 溶液の提供を受けた。この二種類の同量混合液を作り原液とした。かつ二種各々の合成樹脂と水との容積比の 1 : 1 : 1 のものを1号液，1 : 1 : 2 のものを2号液として用意した。接着力は原液が最も大きく1号液，2号液と減少するに反して流動性と透過性は原液が一番劣り1号液，2号液と増大する。

今回の場合2号液は，光背などに見られる極く薄手の彩色に使用したに止り，一般には1号液を使用した。1号液を肌部の顔料に含浸させて，そのまま圧着出来ない処については，1号液を吸わせた状態で乾燥させ，彩色層に弾力性を持たせ次に木の素地と彩色層の間に原液を充



図一4 軍荼利明王 処置前



図一5 大威徳明王 処置前



図一6 金剛夜叉明王 処置前

分に注入し、圧着の目的から鉛の極薄板を巻きつけて乾燥を待った。その他、裳などの断文部の処置としては、亀裂の間から吸い込みの状況に応じて原液又は1号液を滲透させて圧着し、表層に残った樹脂液は艶の原因にならぬ様に丹念に拭き去った。各尊像の本体、蓮座、岩座、火焰光、水牛などの彩色は、この原液、1、2号液の使い分けで充分その目的を達した。不動明王の瑟瑟座についても、同技法による彩色の剥落どめを行なったのち裏側から打ち込まれている高湿によって錆化、膨脹し或いは消滅した鉄製の鋸や釘をできる限り新調の銅製に替えた。その際に各框組や枠組の矧目の麦漆の老化による剥がれに対しては、合成樹脂の使用をさけ同質の材料を補捉する目的から新たに麦漆を調整して使用した。軍荼利明王の右足の接着には、木の履柄を埋め込んでエポキシ樹脂で固定し強度をもたせた。大威徳明王の腕、足首、小牛の角、軍荼利明王、金剛夜叉明王2尊の足下蓮座の蓮弁の接着などは、さほど強度は必要としないので、使い易いペースト状の酢酸ビニール樹脂を用いた。其の他諸々の部材の小片の剥がれにもこの樹脂で接着した。但し必要に応じて銅及び竹の相釘を使用した。降三世明王足下の大自在天、烏摩後の日割れには、同じペースト状酢酸ビニール樹脂による接着と同時に銅鋸を使って固定した。

各尊像に附属した持物や、狛犬などの置物に見られる金箔下の泥下地からの剥がれに対してはボンド系接着剤を用いて貼付けた。不動明王後背と大威徳明王の框座、荷葉座の金箔下の泥下地がやや厚く剥離も大きく木の素地面も不規則な変型が多く接着が非常に困難であった。同樹脂を注入した上に、予め用意したポリ袋に砂を詰めて作った各種サイズの重しをのせて圧着させてみたが、彎曲した部分や凹みの部分にも適度に押さえが効き、泥下地の薄手のものには好結果を得たが、厚手の反り返りについては非常に困難があった。

最後に防黴、殺虫の目的でメチプロンによる燻蒸も行なった。

3. む す び

処置済の五大明王は、三仏堂を離れ、中禅寺湖畔に新築された五大堂に安置された。

なお、物理研究室が担当のX線による透視撮影結果については稿を改めて報告される。



図一七 錆びた鉄釘の膨脹による彩色の傷



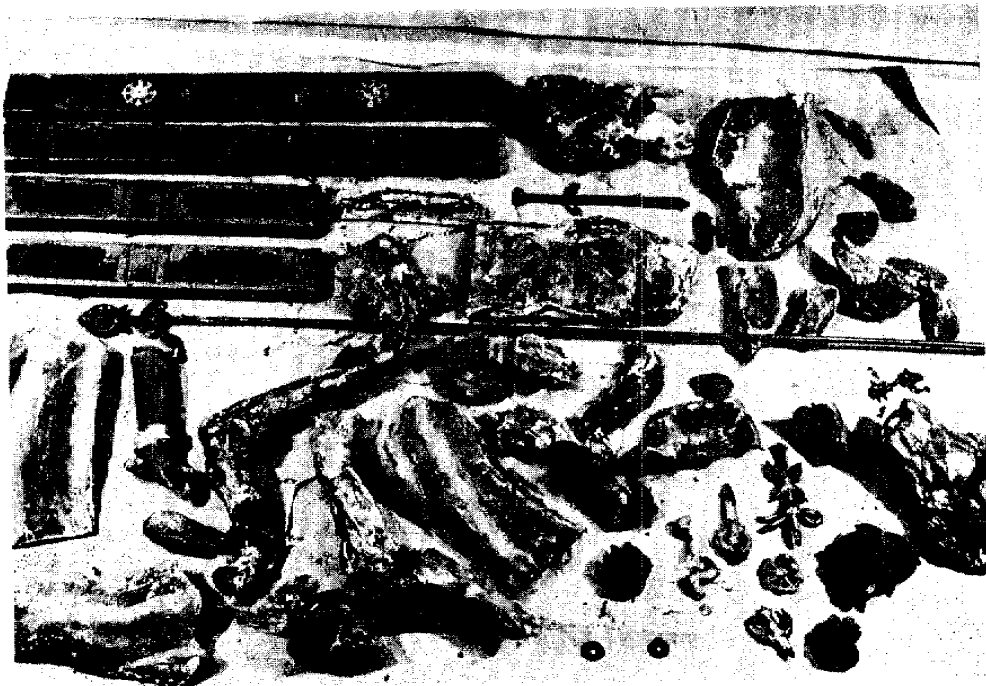
図一八 降三世明王の肌部の剝離剝落



図一九 大威徳明王像の折れた足着（処置前）



図一〇 柄を入れて接着した（処置後）



図一一 集められた剝離部材の一部

Résumé

Akira MOGI and Saburō TATSUTA: Preservative Treatment on the Coloring of the Statues of Five Rajas, Rinnō-ji, Nikkō

The Go Dai Myōō (Five Great Rajas) under discussion are five polychrome wooden statues in the Rinnō-ji Temple at Nikkō. They are Acalanatha (center), Trailokyavijaya (east), Kundali (south), Yamantaka (west) and Vajrayaksa (north). They are judged to date from the 16th or 17th century. The statues are made in the *yosegi* method in which parts are carved separately and subsequently joined.

The coloring on the statues had badly scaled off or floated from the wood surface. Iron clamps and nails used on the statues, pedestals and bases had rusted, expanded or disappeared, causing damage of wood parts and coloring. The adhesive mixture of raw lacque and starch, used at the joints of separately carved parts, had also deteriorated and come off at many spots. For treatment on the coloring we used 6% P. V. A. solution, 20% acrylic emulsion and vinyl acetate resin in accordance with the states of exfoliation, the kinds of the pigments and the quality of the materials. For the loose joints of parts we used epoxy resin, vinyl acetate and, in part, a mixture of raw lacquer and starch. We replaced iron pieces with copper ones as far as possible. Methyl bromide was used for vermicide. We did not retouch the exfoliated coloring nor supplement the missing wooden parts, but treated statues to conserve their present state.